

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 9 日現在

機関番号：37105

研究種目：新学術領域研究

研究期間：2008 ～ 2012

課題番号：20101004

研究課題名（和文） 持続的経済発展の可能性

研究課題名（英文） The Possibility of Sustainable Economic Development

研究代表者 上垣 彰 (UEGAKI AKIRA)

西南学院大学・経済学部・教授

研究者番号：70176577

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：地域大国、エネルギー、環境、マクロ経済、国際関係

1. 研究計画の概要

(1) 本研究の目的は、ロシア、中国、インドの3国およびその他の地域大国（サウジアラビア、ブラジル、トルコ）が、地域経済大国としてどのようなインパクトを世界に与えているか、また、逆に、世界の政治経済の動向がこれら諸国にどのような影響を与えているかを検討する事である。

(2) それを踏まえて、これら諸国が地域大国としての地位を維持・発展できるかどうかの中長期的な展望を導くことが本研究計画の第2の目標である。

(3) 最後に3国とコア諸国との比較を通じて、経済発展に関する新しい理論モデルを構築することも本研究計画の目的である。

(4) 本研究の背景にはいわゆる BRICs の世界経済における台頭がある。BRICs 諸国の台頭は、世界経済のグローバル化の結果であるが、同時にその促進要因・攪乱要因でもある。われわれは、BRICs の中でも、ロシア、中国、インドを主要な対象としつつ、これらをグローバル化の先導者であるコア諸国アメリカ、EU、日本に対抗する「地域大国」と位置づけ、その将来を展望する。

(5) 本研究計画の第1の特徴は、「地域大国」という概念を打ち出していることである。グローバル経済対小国・発展途上国という2項対立的見取り図ではなく、そこに「地域大国」という中間項を入れることによって、より現実に即した構造把握が可能になる。

(6) 第2の特徴は、マクロ・金融、産業構造・企業、資源・環境という側面から見た「持続的経済発展の可能性」という概念を打ち出していることである。

(7) 第3の特徴は、マクロ統計・計量経済の専門家（田畑、佐藤、上垣）と産業論・企業

論の専門家（丸川、堀井）、さらに国際関係論の専門家（亀山）が、密接に協力しあうことが期待される「中範囲のタイトな学際的研究」である点である。相互に理解可能な専門言語を話すこのグループの研究によって、理論と政策の双方に新しい知見をもたらさずである。

2. 研究の進捗状況

(1) 本計画研究班は、第1回国際シンポジウムを平成21年7月に開催した。「地域大国と持続的発展の可能性」をテーマとする同シンポジウムでは、ロシア、中国、インドのマクロ経済、工業生産性などの面からの比較結果が、ロシア、中国、インド、アメリカ、日本の研究者によって報告された。同シンポジウムの成果は、Uegaki & Tabata, 2010 として刊行された。

(2) 平成21年にはさらに、米国の査読誌 (*Eurasian Geography and Economics*, Vol. 50, No. 6) に田畑の論文が掲載された。同論文では、ロシアが世界金融危機によって大きな打撃を受けたことについて、中国やインドとの比較を意識した分析がなされている。これらによって上記1(1)に記した3国と世界政治経済との相互影響に関して大きく認識が進んだ。

(3) 平成22年6月の比較経済体制学会全国大会の共通論題において、田畑伸一郎（領域代表者）と上垣彰（研究代表者）の共同報告「ロシア、中国、インドの経済発展モデルの比較」が発表された。ここでは、3地域大国の経済発展モデルの比較を行った。同報告では、特に、3国に共通する「為替市場への強い介入」にマクロ統計的な分析を加え、それと、現在のグローバル・インバランス（米国

の経常収支の膨大な赤字と地域大国の外貨準備の著しい増大)との関係について考察した。これによって、上記1(2)および(3)に記した将来展望と理論モデルの構築に関して、その基礎を築く事ができた。

(4) その他、中国企業、資源・環境制約下の中国経済、インドのマクロ経済、地球環境政策等に関する研究分担者の著書出版が相次いだ。その多くが本研究計画班内の討論が執筆のきっかけないし基礎となっている。「中範囲のタイトな学際的研究」の成果が確実に実を結んでいる。

3. 現在までの達成度

現在まで本研究は「②おおむね順調に進展している」といえる。後述5からわかるように、すでに分担者、協力者の意欲的な学術出版が膨大に蓄積されているからである。また、我々の問題意識が国際的に認知され、国際的な協力の体制が出来上がりつつあるからである。ただし、得られた知見から新しい理論的枠組み構築するという面では、いくつかの進展があったとはいえ(たとえば、上垣彰「比較の意義について：経済学の立場から」、『比較経済研究』第46巻第1号(2009年2月))、なお残された課題がある。特に領域研究の他の研究班との協力の下に学際的で大きな枠組みを作っていくまでにはいたっていない。

4. 今後の研究の推進方策

(1) データベースの作成を継続するとともに、そのインターネット上での公開に関し、著作権法の問題も考慮しながら、検討し、平成24年度中に公開する。

(2) 個々のメンバーが、実態調査・インタビューを目的に、ロシア、中国、インドに赴き、各国経済の総体的評価の深化をはかる。また、これまでの実態調査の結果を持ち寄って、班全体として総括するような研究会を設ける。

(3) さらに、国際学会(全米スラブユーラシア学会[ASEEES]、欧州比較経済学会[EACES]その他)での報告を継続的に行い、外部からの批判や評価を顧慮しつつ、研究方法、研究対象、成果の発表法に関して、その都度、修正・深化を試みる。

(4) 国際学会での報告に関しては、随時国際研究誌に投稿して、我々の研究成果の国際場裏への発信を行うほか、国際学会での報告内容を国内の研究会でフィードバックすることも計画している。

(5) 当初の計画には記載していなかったが、2011年12月にインドで国際シンポジウムを開催する予定である。このシンポジウムには当計画研究班の多くとインド人研究者を中心として開催するが、ロシア人、中国人、欧米人研究者の参加も期待している。

(6) 今後ともプロジェクト研究員を募る。さらに今後も若手を中心として研究協力者を数名加える。

(7) 「地域大国の持続的経済発展の可能性」に関する書籍を出版予定である。このために、今後、メンバーの研究を総括し、とりまとめを行う機会を適宜設けていく。その際、「理論的枠組み」の構築、他研究計画班の研究との関連性という点に特別の注意を払う。

5. 代表的な研究成果

【雑誌論文】(計40件)

① 田畑伸一郎・上垣彰「現代の国際金融構造におけるロシア、中国、インド」『比較経済研究』第48巻第1号、2011年、pp. 15-26.

② Horii, Nobuhiro and Elspeth Thomson, "China's Energy Security: Challenges and Priorities," *Eurasian Geography and Economics*, 50(6), 2009, pp. 643-664.

【学会発表】(計40件)

① Sato, Takahiro "External Openness and Firm Productivity in China and India: Evidence from Business Enterprises Surveys", 11th bi-annual EACES conference, 27 August 2010, Tartu, Estonia.

【図書】(計16件)

① 亀山康子『新・地球環境政策』昭和堂、2010年、246ページ。

② Uegaki, Akira and Tabata, Shinichiro (eds.) *The Elusive Balance: Regional Powers and the Search for Sustainable Development*, (Comparative Studies on Regional Powers, No. 2), Slavic Research Center, Hokkaido University, 2010, 203ページ。

③ 丸川知雄・大橋英夫『中国企業のルネサンス』叢書中国の問題群⑥、岩波書店、2009年、177ページ。

【その他】ホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/index.html>